若越郷土研究

45の1

グリフィスとその時代

―一八九〇～一九〇〇年代の日本―

山下　英一

グリフィスの*The Mikado's Empire*は一八七六年の出版以来、版を重ねて約三〇年の間、同時代の日本に関心を寄せる欧米の人の間に広く読まれた書物であった。歴史研究の観点からも、明治の日本を知る上で貴重な古典的読物として、今もこの書物は生きている。この*The Mikado's Empire*が一世代にもわたって読まれたのには理由があった。版を重ねるごとに新しい頁が増えていった。

初版	一八七六年	六二五頁
二版	一八七七年	六三五頁
五版	一八八六年	六五一頁
八版	一八九六年	六七七頁
十一版	一九〇六年	七三八頁

この経過について説明を加えることにする。*The Mikado's Empire*は初版以来十一版まで内容の上で第一部と第二部があって、日本の古代から近世までの歴史を記述した前者は従来と同じで、グリフィスと同時代の日本の政治、社会、文化の変化にあわせて新しい記述が後者に追加されていった。その主なものに、まず五版がある。第二部十八章にⅠ. Japan in 1883　Ⅱ. Japan in 1886の二章が追加された。つづいて六版にⅢ. Japan in 1890　七版にⅣ. Japan in 1894　八版にⅤ. The War with China　そして十一版にはⅥ. Facing the Twentieth Century　Ⅶ. Japan a World Powerの追加となった。全部で七つの章の増加で、付録、索引の見直しとあいまって、頁数が初版と比して百頁近く増えたために、十一版は二つに分冊されて出版された。その際、追加七章をまとめて第三部とした。このように*The Mikado's Empire*の出版は一九〇六年（十一版）をもって完結したと見てよいだろう。しかし、グリフィスには引続き新しい時代の日本および日本人について執筆の構想があった。それが一九〇七年刊行の*The Japanese Nation in Evolution: Steps in the Progress of a Great People*であった。

一九〇〇年前後のそれぞれ一〇年を含めて、二〇年間にグリフィスの生活にどのような出来事があったか、また日本の歴史にどのような事件が生じたかを年表で見るように簡単に見ていくと、こうである。まずグリフィスであるが、一八九三年、ニューヨーク州中南部の町イサカ（コーネル大学の所在地）の組合教会の牧師となり、ボストン（ショーマット組合教会牧師）からイサカに移った。一八九八年、妻キャサリンが死亡（四三歳）、一九〇〇年、サラ・フランシス・キング（三二歳）と結婚した。一九〇三年、六〇歳の誕生日を期して牧師を辞めて文筆生活に入った。その他、ラトガース大学より人文学博士号を受けた。（一八九九年）またヤトイ（お雇い外国人）に関する調査を始めている。（一九〇一

年）他方、日本の事情については、日清戦争（一八九四～五年）と日露戦争（一九〇四～五年）という特記すべき事件が起っている。政治の面では一八八九年の大日本帝国憲法、翌年に教育勅語の発布と続く。一九〇八年、グリフィスは日本政府より勲四等旭日章を授けられた。明治天皇睦仁逝去により明治時代が終りを告げたのはそれより三年後の一九一二（明治四五）年であった。

先述した*The Mikado's Empire*十一版第三部の最後の論文Ⅶ. Japan a World Powerでグリフィスは日本をして世界の勢力（強国）の一つと見なした。その依って来たる原因をその論文によって追求することにする。はじめにこの全部で四〇頁（頁六七七～七一七）から成る文章の大筋を述べておこう。

明治になってお雇い外国人の採用と宣教師の活動が日本の近代化に大いに貢献した。なかでも日本の軍隊の育成が最大の課題になった。強力な軍事力を背景に植民地獲得を競う欧米諸国からの知識と技術の伝達は何ものにも代え難いことであった。他方、日本には幕府以来の武士階級が心の依り所としてきた武士道が生き残っていた。しかし近代国家にふさわしい国防力と国際競争に伍して行ける力となるための教育に重点が置かれた。次第に日本は人口の急激な増加に伴う物資の供給の市場をアジアに求め出した。そしてついに清国、露国を相手に領土の私有権を主張した戦いに借物の軍費でありながら勝利したのであった。戦況の成行きについて述べたあと、勝利の裏にフランス、ドイツ、イギリスの兵制から学びとった乃木や東郷らの戦略の外に、戦場での病気、看護、治療など衛生面の徹底した対策のあったことを、日露両国側の傷病兵、戦死者の数の違いによってグリフィスは説明した。戦争では日本人の示めす共同体的性格が大いにものをいった。それは大名への忠誠心が形を変えてあらわれ、統一国を造る天皇への愛情（愛国心）となった。こうみてくるとグリフィスの考えが好戦に片寄ってきこえる。しかしグリフィスの著作が民族間の平和と和解を理想としてきたことを忘れてはならない。だから清国、露国に勝って世界を驚かした日本を「世界の強国」(a World Power)と称しているのではなく、「日本の心」(soul of Japan)ともいうべき真の武士道に西洋の民主主義のもとになる個人主義(indivisualism)と人格(personality)が一体となることで、世界に新しい強国が誕生するだろうと言うのであった。

戦争が人間の歴史である―フルベッキ

言うなれば、*The Mikado's Empire*の三〇年は日本が国力をあげて兵力、軍備力の強固につとめた時代にあたる。実のところ二〇世紀を迎えて、このような日本の前途にグリフィスは世界に孤立して行くというゆゆしき危惧を感じとったのかも知れない。論文の最後、いやこの著作の末尾を飾る言葉は日本がChristian Bushidoの国となり、前途に明るい希望をつないでいるように見えて、実はもはやこれまでとの思いで筆を投じたのではと今は思えてくる。グリフィスが示唆したChristian Bushidoの考えは途方もないと思われそうだが、西洋の規範の大なるキリスト教と日本人のなかの最高のモラルの武士道とが一体

化したものと考えることができる。

理化学教師になって福井藩に招かれたグリフィスが、着任した一八七一年の五月四日に見た市中行進の日本人軍隊の光景はその目に強く焼きついていた。〈朝食後、少年達と散歩に出た。頭の上から足の先まで、ありとあらゆる工夫をこらした軍服を着た一連隊が、ラッパにあわせて見事に行進していた。山では大きな祭があった。〉ついで同年十一月一日にも次の記事がある。〈今日は休日で、内乱で戦死をした武士のための祭りがあった。八時、福井連隊の行進があり、山の共同墓地で一斉射撃があった。昼夜、花火があがり、河原や土堤には数千の人の列ができた。〉

福井のグリフィスは故郷フィラデルフィアの姉マーガレットにそこでの生活で体験した見聞や意見や仕事について手紙で書き送っていた。日記にある福井の軍隊のことは五月十二日付、十一月一日付の手紙で知らせていた。〈休日が一日あって、それは日本のこの前の内戦で死んだ兵士の霊を慰める年中行事です。越前で始めて西洋式軍事訓練があり、武器などの装具をつけた一連隊が行進しました。ほとんど洋服ですが、草履、靴、笠、上着など思いつくかぎりの格好をしていました。〉5/12。また11/1によると〈今日はさきの内戦で戦死した勇士を記念して設けられた年二回の日の一日です。今朝、武芸学校の生徒一、〇〇〇人の連隊の大行進がありました。そして墓地に礼砲が放たれました。十二のラッパの音が気持よく響き、かつて私の経験した短い野営生活を思い出しました。〉一八六三年、二〇歳でグリフィスはペンシルベニア市民軍第四四連隊に入隊して、北軍兵士として南北戦争に参加していた。日記によると、十一月二七日、東京から使者が着いて、総武芸所を廃止せよとの命令を持って来た。この命令はただちに実行されたが、福井人の間に心の動揺がおきたと書く。一ヵ月後の十二月二九日、武生の方へ遠乗りの散歩の途中に、西洋の服を着て歌って来る大きな一団に会った。これが東京から福井県にやって来た福井の軍隊であった。*The Mikado's Empire*第二部十五章にこの福井の軍隊のことが出ている。〈政府軍の三中隊が、フランス式の軍服を着て、天皇の紋のある帽子をかぶり、国旗（白地に赤い太陽）を軍旗として町の兵舎に住んでいる。〉

しかしグリフィスに興味があったのは政府軍より、戦没者追悼記念日に於ける兵士一連隊の服装であり、日本の軍隊の揺籃期の姿であった。〈五月四日、――一八六八年から七〇年にかけての内乱で戦死した兵士を記念して、国の祭礼が行われた。今日はその戦没者追悼記念日である。町中が休む。朝、兵士一連隊がどっちつかずの服装で行進した。というのは、着物と洋服を混ぜて着て、私服でも軍服でもない服装だからである。草履と長靴、きついズボンと袴、ひさしのある帽子、つば広の帽子、フランス風軍帽、坊主頭、さかやきとちょんまげ、洋式に刈った頭髪が、交互に入り乱れて来た。この寄せ集めが滑稽劇（パーレスク）になり、唯一のアメリカ人見物が笑いを押さえようとして、今にも歯を押しつぶしそうになった。フォルスタッフの連隊も流行歌の「マリガン・ガーズ」（混雑煮（ごったに）近衛兵）も全く顔色なしであった。〉（*The Mikado's Empire*第二部十五章）それから三〇年を経て、まざまざとその記憶を呼びさまして、日本が

近代軍隊にまで成長した事実を驚異の念に駆られて書いたのがJapan a World Powerのなかの次の記述である。

一八七一年五月四日、越前藩主の招きで、日本人戦没者記念日のために福井で編成した日本連隊の行進が見られたのは望外のよろこびであった。およそ八百人の有望な青年が藩の用意した武器などを身につけていたが、服装はこれがなんと各自が思い思いに見立てた「西洋着」のつもりであった。その多くは体にまとったこともない「野良着」のようなものを着て、まるで色とりどりの浮浪児の行列が閲兵席の前を行進するように見えた。イースト・ロンドンやキャサム・ストリートの店に並ぶ略奪品がどっさり福井に投げ捨てられたようにも思われた。さまざまな衣服があり、子供着、老人着、女もの、男ものであろうと、また大きさ、着具合、時代の流行が何であろうと、どれも目立っていた。種々雑多な衣類が古い絵本や最新流行の洋服のスタイルを写し間違えていた。一外国人来賓として困ったことは、視察のみならず賞賛も期待されていて、その気持ちは複雑に混りあって、まったく抑えがきかなくなっていた。真直ぐ顔を上げようとしながら自責の念に駆られた。ハンカチを口につめてこの場を切り抜け、なんとか外国人教師としての体面を汚さずに終った。

このようにグリフィスが福井で最初に見た〈ありとあらゆる工夫をこらした軍服の一連隊〉の光景は、その日記、手紙に、そして著書（一八七六年）、論文（一九〇六年）のなかでは潤色されて書き継がれていった。このことはグリフィスにとって大事なことで、それが文章になると単なる見聞の繰り返しであるどころか歴史を見る場合、そのコンテキストのなかにそれを再生して、むしろ歴史認識を高める働きを与えることになった。例えばグリフィスにThe Recent Revolution in Japanという論文がある。これはグリフィスが日本について書いた最初の重要な論文（一八七五年）で、*The Mikado's Empire*の第一部十八章はこれに大幅な改訂を加えたものである。しかしその骨子は「ペリー以後の事件だけを見て今日の日本を理解しようとするのは誤りで、一八六八年の重大な発展の根底は過去の世紀のなかに見られる」とあるように、グリフィスのいう明治維新の原動力は「外」からの衝撃(impact)からでなく、「内」から出た衝動(an impulse from within)であった。一九〇五年、ポーツマス条約の調印の年にバッファロー歴史協会でグリフィスが行った演説は、十三代米国大統領ミラード・フィルモアについての再評価であった。この演説から一〇年後の一九一五年、グリフィスは満を持して『フィルモア伝』を上梓した。ペリーが実質上、日本を開国したというのは米国人が一般に持つ迷信で、うぬぼれも甚だしい。ペリーは電気のボタンに触って、なかの機械を動かしたまでだ。日本遠征成功の栄誉はペリーと同じくその親書の第一目的とした友誼を重んじるフィルモアにもあった。しかも一世紀以上にわたって日本人の内部に芽生えた知力が前以て準備されていなかったら、ペリーは不首尾に終ったであろう。ここにもまた四〇年の時を隔ててなおも変わらぬ著者の歴史的直感にたい

する信念の深さと持続力の強さを思わないわけには行かない。

歴史的直感の正しさ、文学的想像の豊かさに加えて、グリフィスには着想の面白さがある。一八九四年の日清戦争における病兵の数は傷兵の八倍だった。海軍で再三、脚気がおこり半数の兵士がこれで戦闘能力を失った。この時は兵士が病気で動けなくなるまで医者は何も手を打つことはないという考えでいたのだ。この反省から、一九〇〇年までに携帯用湯わかしや病院の改良などがあって、その年の北京攻略の連合軍の戦死者が露、仏、独、英、米、日の順に露の八・七五パーセントに比して、日は二・五一の最下位だった。一八九四年に八・一パーセントもあった死者が五・〇一まで減り、病死の傷死にたいする割合が九・七から二・三パーセントになった。病死は八・四から四・二パーセントに下った。一八七七、一八九四、一九〇〇、一九〇五の戦争の傷死者はそれぞれ一七・〇、九・七、四・六、一・五一になったというようにグリフィスは数字を上げて、その背後に日本の軍隊に衛生面の改良のあったことを述べる。

その第一にあげられるのが脚気対策だった。福井のようにオランダ医学による治療処置のとられていた藩は数少なかった。まずしい食糧と節倹令は別として、一世紀にわたる日本の人口の変動がなかったのは、伝染病、疫病、飢饉がその原因であった。夏、脚気にかかる人は何百万に上った。この問題と取り組むため兵士の食糧を混合食にして、なかに刺激物の入らない、栄養の高い食品を含めた。とくに海軍で艦隊を無力にしたこの脚気が医療により除去されるようになった。水兵の体重が平均して三ポンド増え、身長も半インチ伸びた。身長の伸びは日本全体の現象であった。一八九二年から一九〇二年の一〇年で徴兵検査を受けた四百万人中、五・四フィート以上のものが、一〇・〇六から一二・六七パーセントに上った。逆に五フィート以下のものは二〇・一七から一六・二〇パーセントに下って、日本人の身長は伸びている。

医学の知識でも、日本人は一九〇四年現在の軍部内のそれは、科学と実験のたまものである銃弾や砲弾による死者の効率のよさに負けない成功を予測していた。軍医の仕事は、予防、治療、恢復の順とされた。ボア戦争（一八九九―一九〇二年）で英国の病死は傷死の七倍であった。スペイン・アメリカ戦（一八九八年）では傷死一に対し病死は一四であった。しかるに日露戦の日本の傷死者と病死者の割合は四九・九九対五〇・〇一と同等であった。これには戦地の衛生面の改良がものを言った。飲水は沸かす。病院の飲食物は消毒する。幸いなことに日本人の習慣と宗教の一部になっているきれい好きが予防に役立った。

予防といえば福井の蘭医笠原良策白翁の名をあげるのをグリフィスは忘れはしなかった。白翁は『引痘新法全書』を読んで、はじめて西洋の種痘法を知り、痘苗取寄方を出願したのが弘化三（一八四六）年のことであった。二年後藩主松平慶永はこの願をうけ入れて、参政中根雪江の斡旋で幕府に請願したところ、幕府の許可がおりたので、長崎奉行に内命した。（嘉永元年）翌年、白翁は福井藩命により痘苗を求めに長崎へ発つ。痘苗はすでに京都の医師のもとに到着していた。これを京阪の小児に接種して痘苗を作り、帰藩す

るや種痘を開始した。福井浜町に假種痘所を開いた。白翁は明治十三（一八八〇）年、七二歳で没した。福井の人物で忘れてならない人に瓜生寅がいる。先に紹介した論文The Recent Revolution in Japanのなかで、グリフィスは瓜生寅を翻訳家として貢献した洋学者の一人にあげていた。瓜生は十八歳になって遊学した長崎でフルベッキから英語を習った。多数の翻訳書のなかに英国海軍局士官常備の『演習軌範』乾、（一八六四年）、『英式歩操新書軽兵部』巻之七（一八六五年）、『歩操新書増補』生兵篇、小隊篇、元込旋條銃上下、大隊篇上下、（一八六八年）がある。この頃、瓜生は藩の英学取調方兼兵学所へ出向の身となり、大砲小銃等について相談役にも任ぜられた。また横浜英軍兵営にて兵事の研究を命ぜられている。瓜生は大政奉還を前にして、英公使パークスと大阪入りして、早速、京都の春嶽に横浜の英軍兵営での研究成果とパークスの動静について報告していた。福井藩の学校へお雇い外国人を招聘するにあたり、瓜生からフルベッキへと春嶽の意思が伝えられた。その一人が化学を教えるグリフィスであった。瓜生寅は大正九（一九二〇）年、六七歳で没した。

福井藩はお雇い外国人にグリフィスの外にも、医者、兵学教師の招聘を計画していたが、医者は来ず、イギリス砲兵士官ブリンクリー中尉は明治政府によって東京に引き留められた。封建制度の廃止と政治の中央集権化がこの計画をすっかり変えてしまった。このようにかつての大名の地方政府の解体と混乱の様子はグリフィスによって*The Mikado's Empire*のなかに記録された。本文から逸れるがこの機会に書いておきたいことがある。それは小浜藩が江戸の藩邸に英語ができるので士族として雇った塚越鈴彦という人物のことで、塚越は埼玉県生れ、横浜で外国人について英語を学び医学・化学の研究を志していた。そのころ、小浜藩は医学校の設置を計画していて、塚越は藩にとって適材と思われたのだろう。明治一年、塚越は小浜の英学校で教えた。同三年、小浜を出て、横浜から化学研究のため渡米、自費生活三ヵ年後の同六年帰国した。鈴彦を酸素（すず）彦と書いた頃もあった。明治十九年、四一歳で没した。

維新後、日本軍隊の成立をみるまでの間は先に述べたようにそれまでの藩ごとのポリシーに準じて兵学と洋学への関心と取り組みが続いた。しかしここに日本の国の取るべき道を決めなければいけない選択をせまられる時期が来た。一八七〇年七月、フルベッキの家に日本の政治家たちが集り、秘密会議が午後二時から夜明けにかけて続いた。その当時、フルベッキは日本の教育の監督役をつとめていた。その時のフルベッキの意見を直接本人から聞いたとして、グリフィスは大体このようであったと述べている。

「みなさん、あなたがたの意見は世界の善良な人々の希望と願望と何ら変りません。キリスト教徒の祈りと同じものです。にもかかわらず戦争が人間の歴史です。ロシアの樺太島の一部専有と対馬への目論見、安南のフランス、台湾や極東のどこかに植民地を求めているドイツ、英国の印度征服のことなどがなければ、あなたがたのいう無防備、平和的発展ひとすじでいっていいでしょう。しかし過去の事実を見ても、現在

の状態を見ても、あなたがたのいうポリシーは全く通じません。そこで私の忠告ですが、沿岸の防備を固め、軍隊を集め、階級を問わず全国民が自分に愛国心を植えつける機会を与えることです。青年に教練を与えつつ、学校で教育を受けさせなさい。国の防衛と個人の教育を一体化したこの計画がみなさんの目標とする統一国家を確保するための最も有効な道でしょう。サムライの国にしてください。」

ここでいうサムライの国とは全国民が外敵から国を守って戦う人になってほしいという意味であろう。自衛のための軍隊、それに愛国心をもつ人づくりの学校教育という提案は、近代国家として日本のとる最良の策であるとフルベッキは考えた。グリフィスが陸軍、海軍の各省のお雇い外国人三名の名をとくにあげている。その一人は一八八五年、陸軍省が雇ったドイツ人メッケル（Meckel, Klemens Wilhelm Jacob）参謀少佐で高等用兵学を講義し指導した。講義は通訳を介してドイツ語で行われたが、学生との間に友愛の念をいだかせる能力にたけていた。一九〇四年の最初の成功は教え子の黒木為禎（ためとも）大将らによる感謝の電報となってメッケルのもとに打たれた。メッケル以後、軍隊を三倍に再編制して、強壮な男子の総人口からいつでも戦える兵隊、講義と教練を受けた予備兵、在郷軍人を供給できた。次の一人は一八七三年、海軍省が雇った英国人ダグラス（Douglas, Archibald Lucius）准艦長司令官で東京の海軍兵学寮の校長であった。元帥東郷平八郎はその教え子であった。三人目は、ベリー（Berry, John C）という米国人で職種は私雇いの医師、医学顧問であった。グリフィスによるとベリーは宣教師で日本政府によって大規模に取上げられて、皇室の貴婦人がその手本を示すことで一般の女性もこの仕事にしりごみすることがまったくなくなった。その結果多数の志願者が選抜されて、清国や満州の戦いに於て、軍医、担架かつぎ、野戦の付き添い看護婦、病院看護婦の数が十二分に足りたという。日本が露国に勝ったことは驚きであった。しかしそれ以上に日本のなした衛生面の徹底した処置の方がもっと驚きであったとグリフィスは書いた。

戦勝の記念にスミレを摘んで

一九〇四（明治三七）年五月一日、司令官黒木為禎大将の率いる第一軍（四五、〇〇〇の兵）が鴨緑江を渡河して九連城を占領した。露国軍の大砲二八門を分捕り、兵士四〇〇人を捕虜にした。その記述に続いてグリフィスはこう書く、「美しい自然を愛でながら、うれしそうに兵士は休息した。そして戦勝の記念に家郷に送るスミレを摘んだ。」その日本軍の勝利でさえも、日本が文明の強力な原理（世界の最良の感情に支えられている）に貢献した道徳的に立派な行為に比べると少しも偉大でない。つまり戦中、戦後のロシヤ人に対して人道上誠実であったというのだ。具体的にいうと、桂太郎首相のいう「この戦争は主義、（有色）人種、国や個人の偏見に関係する戦争でなく、原理のみの戦争である」にのっとり、日本に住むロシア人、ギリシア正教の教会の信者は完全に保護された。また十万のロシア人捕虜が日本で仮出獄を許されたり、気

持ちのよい環境のなかで留置された。大体、日露戦争の原因は政治上より経済上にあったというのがグリフィスの見方であった。その背景に、人口の増加があった。一八二八年、二千七百万人、一八七五年、三千四百万人、そして一九〇三年、五千万人（台湾を含む）と着々と増加していた。この三〇年に日本が農業国から産業国へと一変した。茶と絹を輸出するために水田をつぶして茶畠と桑畠を拡げた。産業と商業を通して外国から食糧を買う方法が殺到すると、国内の農業の発展がおくれてくる、一方で人口は増え、ほしい物は多くなる。ということから、明らかに海洋の自由を掌握し、食料の供給を確保し管理することがきわめて必要になった。日本は米作の土地を朝鮮に、市場を満州に求めなければならなかった。一方、ヨーロッパのいろんな産物、米国の小麦粉、綿、鋼鉄を買うのに支払う金を作らなければならなかった。一八九一年ロシアのシベリア鉄道建設が始った。ロシアの最も主要な欲求は数世紀にわたって、暖流のある出口を手に入れる、不凍結の港を所有することであった。一九〇二年ロシアと清国の間に満州撤兵に関する協定が調印されて、ロシアは十八ヵ月以内に撤兵を約束した。にもかかわらず翌年、協定最後の日の十月八日、ロシア軍が奉天省城を占領。このロシアの偽誓の日に日本は清国との間で、奉天、大東溝の開放などをふくむ追加通商条約に調印する。グリフィスはこの日を世界の近代史のかなめ（中心的出来事）になったという。グリフィスの日露交渉の日を追っての記述および日露戦争の戦況はここでは省くが、日本の勝利の政治上の立役者を三人（高橋是清、末松謙澄、金子堅太郎）あげていて、日本政府は軍資金の調達とヨーロッパ、アメリカへの同情を求めて、この三人を欧米へ派遣した。なかでも高橋は三回にわたって貸し付けを取り決め、募集額以上の四億五千万ドルの申し込みを取った。貸付け一回（利息六パーセント）には関税が、二回（四、五パーセント）にはタバコ専売が、三回（四パーセント）には日本の誠意が抵当に入れられた。

昨今、戦争論と銘うつ図書の出版が目立っている。そのなかの一冊、多木浩二著『戦争論』（岩波新書、一九九九年）から、「第二章軍隊国家の誕生―近代日本」を読む。多木は日清、日露の戦争の結果、日本は強国であると国民が誤解しはじめたといって次のように述べる。「①国民は日本がアジアの最強国になったという自覚をもち、日本は外征して国威を発揚する国家だと思いはじめた。別の言い方をすると、大衆のあいだに軍国主義的ナショナリズムが広がった。」「②日清、日露で一般の日本兵士が貧しい中国人を眼にしたことが、かつての中国文化への尊敬を侮蔑に変える大きなきっかけとなった。」日中戦争、第二次大戦を戦った日本は多木のいう「軍国主義的ナショナリズムと天皇制ファシズム」の両論で動く天皇の軍隊を持つ国家になっていた。今日、これらの戦争の道義的責任が日本国民の一人一人にとわれなければならないとき、この事実を単なる過去の出来事の蒸し返しでなく、それに対する歴史意識を現在の認識のなかで働かせて、未来の創造につないで行くべしという意味の多木の意見は正しい。しかし日露戦争の勝利で国民が日本を強国と誤解しはじめたという場合、多木のいきなり誤解という言葉には歴史意識との間に短絡的

付会が感じられないだろうか。つまりその時代には同時代人に共通の感覚があって、誤解というには及ばなかったということである。こんな文章がある。

げに自分が花を見たのは、之れが最初なので有った。内地で聞けば満州は不毛の地、春が来たとて花が咲くものか、草でも生えたら大きな事だと思ってゐたが、實際来て見ると、見渡す限り茫漠の平原、畑には粟や、高粱の切株がある許りで、隴畝、川岸、何處を歩いても草らしい草もなかったので、冬からかけて春の始めまで、自分は『不毛』を眞事と心得てゐたので有った。

それが風温み、日影暖かに成るに連れて、處々の丘上、河畔、壠頭、離々たる草の若芽を吹くを見て、聞いた程でもない、が、併し、花は咲くまい。菫や、蒲公英や、紫雲英やは、薬にし度くともなからう！と思ってゐたのに、淋しい墓場に此の蒲公英、自分は瞥見して愕とせざえるを得なかった。

ここに引用した文章は、西村真次著『血汗』（精華書院、明治四〇年）の一節である。西村は在学中二五歳で輜重輸卒として、日露戦争に従軍したが、その陣中で病気に罹り帰還したまでを記録したのが『血汗』である。先にグリフィスが戦場のスミレを摘む兵士の心情を述べたように、前途が暗澹としている病兵が、ふと見つけたたんぽぽの花の感動を西村の文章はよく伝えているではないか。さらに特色をいうと、主人公は反戦争主義者に同情し、妻子や老親を残して来た者、事業半ばに赤紙を手にした者のいるのを悲しみ、その胸中に厭世の念が往来しつつも、人間の理想と平和を高く見る学徒であった。作家中野重治が『血汗』を「本質的に描かれている」と評して、名著に非ざる名著と書いたのもむべなるかなである。

中野のついでに、その母校の福井中学校と日露戦争について少し書いておくと、中野重治の在籍したころ、講堂の壁に日露戦争における福井中学校出身戦没者五一名の肖像写真が額に入れられて懸っていた。公立学校、とくに中学校・師範学校ではすでに軍隊調の教育が行われていて、規則づくめの極めて厳格な校風の樹立を目ざしている学校も少なくなかった。ここにその一例を示そう。一九〇一（明治三四）年、島根県立第二中学校に関貢米が英語の教諭心得として赴任した。関は慶応二（一八六六）年、敦賀に生まれた。明治十九年東京一致英和学校（明治学院前身）を卒業、英文学に関する著書がある。代表作『詩人と戀』（明治三四年）。関の赴任した時は、その中学でゲートル事件が尾をひいていた。新任の教頭が体操教師と協力して生徒に制服制帽と常時ゲートルの着用を強制したことから、これに不満の生徒ら三年生以上がストライキ（同盟休校）を起した。しかしゲートルは体操の時間だけにつけることで解決していた。翌年、こんどは教諭六名が辞表を出す事件が起った。当時の「山陰新聞」によると、校長の教頭、体操教師にたいする信任が厚く、「職員に繁文縟礼の手数を重ねさせ事に触れ物に就きて職員を叱責するなど」彼らの欲しいままにさせたことにあった。三年生が同盟休校に入った。この紛擾事件の中心人物が関貢米であった。これは管理者により中学校の軍隊化が進められている一方、それに反

対して自由化を守ろうとする教員が立ち上がった事件であった。この種の生徒の同盟休校による紛争に対して、文部省は全国の中学校・師範学校に厳重な取締り方を訓令していた。（明治三五年）紛擾事件は関貢米の免職、他は休職、転任（教頭、体操教師を含む）という結末になった。関貢米はその後関露香の名で『英語綴り発音解』（明治三六年）を出版したのを最後に、「先生」と呼ばれるのを嫌い、二度と教師にならなかった。大阪毎日新聞社に入り、明治四三年、西本願寺法主、大谷光瑞の第三次印度探検隊に同行したことが特筆される。

戦争と学校教育についてグリフィスはJapan a World Powerのなかで、一九〇四年の戦争に参加した新世代の平民（農民と職人の健康で立派で身体の持主）が公立学校で学ぶ特権を受けていたことを協調した。山地の人、漁師を含む平民はあらゆる苦難や危険に直面することに慣れていた上、知力でも帝政ロシアの農民よりはるかに進んでいた。精神的にも、知力と体力の完成度においても、日本の公立学校出の軍隊はリンカーン大統領のもとに集って、奴隷解放のために戦った市民軍に驚くほど似ていた。そういうグリフィス自身が、ペンシルベニア士官候補生に志願し、一八六三年、同州市民軍第四四連隊に所属、軍旗護衛隊伍長となって、グラント司令官の北軍兵士としてゲティスバーグ戦に参加した。

民主主義（デモクラシー）とは個人の完成のことなり

フィラデルフィア生れのグリフィスはカルバンの影響を受けたオランダ系の改革派教会に所属していた。そのグリフィスが七〇歳にしてコレヘトという智者の歌ったことば（『伝道者の書』、或は『コレヘトの言葉』の十二章）が分ったというのだ。信仰と熟慮、記憶や教養に富んだ健康な今の生活にくらべれば、若いころの生活は「空し」かった。だから老衰になって、死んで、葬られる人間の生涯を空しいと見る前に、身体という「家」を守るようにしたい、いわば老齢学のすすめを書いたのが、*The House We Live In*（一九一四年）であった。コレヘトの言葉のメタファによる解釈の発想は面白いが、日本の話題の挿入、鋭い米国批判も加って、いっそう面白い。日本の挿話では、「歩くこと」にこんな話がある。日露戦争で、日本人はわらじ（草鞋）をはいて脚の訓練をして、重いブーツのロシア人に勝った。また他のところで、日本の負傷兵の死亡数が低かったのは、外科医の腕だけでなく、農家出身の兵士の純粋な血液と清潔な身体のせいだったという。これらのエピソードからも日露戦争とその後の日米関係についてのグリフィスの考慮が影をおとしている。日本人移民排斥が米国の世論にひろがり始めた。親日派のグリフィスもこの成行きを危惧した。むしろ米国社会の欠点を批判した。「繁栄」という言葉が持つ低劣な道徳、物資主義、偏見、拝金主義のはびこると見る米国へ、グリフィスはコレヘトの言葉の教える心身の平和を呼びかけた。

親日という言葉には厳密にいって日本人に対し偏見のない信念を持って意見のいえる立場にいなければならないという原則がある。日本の事情に通じているというだけでは親日家とはいえないだろう。グリフィスは言う。日本人は個人が全体にとって必要であるとの

認識から、すべてば公共のためにしてきた。共通の理由のために個人の目的を否定する必要を認めているので、力も持ち危険性もある個人主義(individualism)が日本人の生活にまだ深く入っていないと。この全体のための個人、自己のための個人という考えの二つの個人は片や国家(全体)主義、片や自由(民主)主義にも通じるものであって、しかもこの二つの個人は撞着することなくあい補っていくことで国家と個人の正常な関係が成立すると思われる。明らかにグリフィスは日本が前者に片寄るのを心配した。かつての藩主へのサムライの忠誠心が兵士に受けつがれて、天皇への親愛の情へと変わっていた。一八七〇年(グリフィス来日の年)の日本とくらべると、一九〇四年の日本は財源と耐久力が世界五位の強国になった。旅順において日本兵士の見せたおそろしい衝撃力、おどろくべき耐久力と犠牲心は、門外漢には宿命的にしか見えないが、識者にとってそれは知的な計算の結果に見えた。再びグリフィスの個人主義にふれた部分について述べると、「欧米の指揮官の間にごく普通にみられる嫉妬、口論、不満といった極端な個人主義が日本人にはない。日本人の文明は公共的なのである。日本人は個性(personality)が弱い、だからこそ、「大和魂」(soul of Japan)が日本人の合理的で有効的な概念になっている。」という。しかしこのあと、グリフィスは「けれども」といって、「天皇の祖先」(これを「皇祖」といった。)が次第に日本民族の頂点にあって「神の子」を意味するようになったことを指摘した。日露戦争後の日本に「大和魂」と「神の子」を一つにした日本精神が形成されて新しい軍隊が生れるとグリフィスは思ったからであった。この傾向に抗してグリフィスが本来の意味での「個人主義」と「個性」を持ち出したことは、当時、外国人の日本人への数少ない貴重な意見とし非常に重要である。なぜなら、グリフィスの言う個人の完成が民主主義国家(democracy)であった。

この戦争による日本の負傷兵は二二〇、八一二人、そのうち、死亡は四七、三八七人、一七三、四二五人が恢復した。また病兵二三六、二二三人中、死亡は二七、一五八、二〇九、〇六五人が恢復した。これだけ犠牲を払っての勝利だったが、日露講和条約において日本側に働いた動機は、グリフィスの言うには利益のための戦争を怖れるサムライの心と、国民の精神と活力を金もうけのための征服と大虐殺の道に向きを変えることに不承知のこれも同じサムライの心からでた至高なものであった。福井に来て五ヵ月後に廃藩になったが、福井のサムライを知ったことはグリフィスにとって幸いであったに違いない。浪費的戦争の遂行と交戦状態の続行は野蛮に逆戻り、武士道とは全く相入れない精神を表明するようなことになるだろう。

グリフィスの論文Japan a World Powerはこの辺りから条約後の日本への直言に入る。もし日本が全く島国根性のまま、偏狭でいたくないなら、たとえ宗教の問題でも、日本人の精神生活の向上心と形式は最高の理念に移らねばならないと言う。グリフィスはここでこれらの理想のために貢献した日本人の名を列挙して短い解説をつける(一部をのぞいて解説は割愛する)。手島精一、北里柴三郎、穂積陳重(のぶしげ)、箕作佳吉、小村寿太郎、高平小五郎、新渡戸稲造、岡倉覚三、岡倉由三郎、朝河貫

一（*The Early Institutional Life in Japan*グリフィスによると、日本人によるすぐれた英文の著書に共通の欠点は歴史感覚の不足である。すなわち初期の日本の伝統について何の当てもないのに、その事実に直面しようとしない。その例外が朝河のこの本だという。ここでグリフィスは学問の自由"academic freedom"の大切なことも言っている。）、大谷光尊、高橋泥舟、勝海舟、山岡鉄舟、小松宮彰仁親王、九条実美、近衛篤麿、尾崎紅葉、坪内逍遥、福地源一郎、市川団十郎、市川菊五郎、片岡健吉、板垣退助、田口卯吉、副島種臣、大隈重信、田中不二麿子爵夫人、鳥尾小弥太、三宮義胤、佐雙左中、徳川家達。これらの日本人のなかには最近に亡くなった人もある。グリフィスの学んだラトガース・カレッジの数学教授で、日本の文部省に招かれて学監として貢献したD・マレー博士も、ニュージャージー州ニューブランズウィックの自宅で亡くなった。（一九〇五年）日本に二五年間、医学の面で貢献したドイツ人医師J・スクリブ博士も東京で亡くなった。（一九〇五年）

「日本人は潜在力においても現実においても、世界の偉大な民族に匹敵する創造的な知力を持っているか」と問われたとき、グリフィスの答えは、四〇年来、日本人、日本の風習、文学、思想、歴史と関ってきて、まだ「イエス」でも「ノウ」でもないと言う。ただ選択力と適応力では日本人の才能は高くて独特なものがあるのは確かなようだと付け加えた。日本の仏教は中国とインドの非常に異なる文明のもつ物心両面のなかの最高のものをとり入れて発展させたものであると指摘した。その仏教が日本人の心を奪い、芸術の花を咲かせた。そこで次に来るのは、すでにヨーロッパの哲学と科学を取り入れた日本人だけに、キリスト教であることは想像に難くない。ここでグリフィスは、日本人がその才能に最もふさわしい形で「主の声」を解釈して具体化するだろうと述べる。

要するに、日本人は奴隷のような家来の模倣者でなく、偉大な名将の真のサムライとして「主の声」を聞き、心に留め、従うだろう。太陽の昇る国に、外国の教会の協力や伝統的信条からの希望でない、クリスチャン武士道の明るい約束がある。

グリフィスはサムライの忠誠心を日本精神ととらえて、これを賛美し、他方、日露戦争で示した日本人の能力も高く評価した。と同時に日本人に個人主義という新しい個性のあり方を要求した。二〇世紀の日本にとって最大の危険は軍隊が原因となると、その著*The Japanese Nation in Evolution*で指摘したのは賢明であった。クリスチャン武士道(Christian Bushido)で締めくくった*The Mikado's Empire*（一九〇六年）のなかの最終章の論文Japan a World Powerは、これも同書に入っている論文The Recent Revolution in Japan（一八七五年）とともに、前者は二〇世紀の日本の前途を、後者は維新の日本を見据えた論文として重要な文章と言わざるを得ない。

今日、日本の民主主義の脆弱なことを論じる声がまたいろんなところで聞かれる。と同時に誤った個人主義でものを言う声も聞えてくる。自らの国の過去の事実から目を反らすことをもって歴史感覚に欠けると一世紀前に

教えてくれたグリフィスに感謝してこの稿を終りたい。